

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00453

研究課題名(和文)『ホビット』以前のJ. R. R. トールキン：初期学術論考の草稿研究

研究課題名(英文)J. R. R. Tolkien before The Hobbit

研究代表者

辺見 葉子 (HEMMI, Yoko)

慶應義塾大学・文学部(日吉)・教授

研究者番号：40245428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：J. R. R. トールキンがファンタジー作家として注目を集めた『ホビット』(1937)以前の、フィロロジストとしてのトールキンがゲルマン語とケルト語の関係性を扱った、初期の学術論文の未刊手稿原稿を対象に調査を行った。

オックスフォード大学ボドリアン図書館所蔵のトールキンのリーズ大学時代の公開講座 "Celts and the Teutons in the Early World" (1929)の手稿原稿およびオックスフォードに教授として移籍してからの "The Name Nodens" (1932)の手稿、およびこの考古学調査を主宰したWheelerや地名研究の権威Mawerとの書簡を調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

"Celts and the Teutons in the Early World" (1929)の手稿原稿に関する研究はトールキン研究において、全く未踏のものであり、トールキンの「ケルト」の概念の根幹、および後の "English and Welsh" への発展過程が明らかに出来たのは大きな成果である。

また、"The Name Nodens" (1932)の手稿原稿およびこの考古学調査を行ったMortimer Wheelerとの書簡のやりとり、またこの原稿の準備段階で地名研究の権威Allen Mawerと交わした書簡の調査も、今まで全く行われておらず、トールキン研究に大きく貢献できるものである。

研究成果の概要(英文)：The Tolkien manuscripts examined during this research at the Bodleian Library, Oxford, date from his early academic career, before the publication of The Hobbit (1937), which brought him into the limelight as a fantasy writer. The principal manuscripts studied during this project concerned Tolkien's public lecture titled "Celts and the Teutons in the Early World" (1929) from his time at Leeds University. The examination revealed Tolkien's fundamental view on the relationship between the Germanic languages and the Celtic languages, which was further explored in his later lecture, "English and Welsh." Other manuscripts examined during this project include those concerning his article, "The Name Nodens" (1932). The correspondence between Tolkien and Mortimer Wheeler, who presided over the archaeological survey at Lydney Park, and that between Tolkien and Allen Mawer, the authority of Place name studies, are also studied.

研究分野：J. R. R. トールキン

キーワード：J. R. R. トールキン 未刊草稿調査

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1．研究開始当初の背景

J. R. R. トールキンは、*The Hobbit: There and Back Again*（『ホビットの冒険』1937年）の出版、およびその続編 *The Lord of the Rings*（『指輪物語』1954-55年）の成功とともに一躍ファンタジー作家として名を馳せることとなったが、周知の通り本業はオックスフォード大学の中世英語英文学教授であり、専門はゲルマン語のフィロロジであった（1925-59年）。これと比してあまり知られていないことだが、トールキンはオックスフォード大学に着任する以前の1920年から1925年、リーズ大学でも教鞭を執っていた。*Sir Gawain and the Green Knight* のエディション、*A Middle English Vocabulary* 編纂といった中世英語英文学研究への主要な貢献はこのリーズ時代の業績である。

オックスフォード時代「以前」、すなわちリーズ時代を含むトールキンの初期の学問的キャリアについては、従前のトールキン研究で注目されてこなかった。しかしこの作家デビュー以前のトールキンの学術論考は、彼の「ケルティシスト」としての一面を考える上で、「ケルト」への興味の一貫性と同時に「ケルト・ゲルマン」観の変遷という視点からも極めて重要である。

本研究では、科研費の補助を得て2012年から継続して研究を続けてきたトールキンの「ケルト」観を映す‘English and Welsh’の未刊手稿原稿調査に、1920年代初期のリーズ時代から『ホビット』出版以前の未刊学術草稿調査という新たな方向性を加え、‘English and Welsh’研究を更に深めることも可能ではないかと考えた。

### 2．研究の目的

現在オックスフォード大学ボドリアン図書館が所蔵するトールキンの蔵書のうち Celtic Library と呼ばれている多数のケルト関係書は、リーズ時代に集中的に収集されたものである。トールキンは1924~25年には Middle Welsh の授業も担当しているのである。ボドリアン図書館には、このようにトールキンが「ケルト」への興味を高めていたリーズ時代の授業・研究ノートなど、academic papers の手稿原稿が多く収蔵されている。特に‘Celts and Teutons’ と題されたリーズ大学における講演(1929年)の草稿や、Lydney の地名研究に関する草稿は、彼のケルティシストとしての側面を考える上で、後の1955年の‘English and Welsh’との関連性からも極めて貴重な未刊原稿である。

『ホビットの冒険』および『指輪物語』など、トールキンの物語世界の構築がオックスフォード大学教授時代の彼の学術的興味と表裏一体を成す関係にあったことは言うまでもない。しかしトールキンのリーズ大学時代を含む「ホビット以前」の初期学術論考研究は、これまでトールキン研究の視点から抜け落ちていた部分である。

本研究課題はこの状況を踏まえ、‘English and Welsh’の草稿研究によるトールキンの「ケルト」観の考察を基礎として、これと深い関連性を持つ初期学術論考の手稿研究を行う。1920年代から‘English and Welsh’の1955年に至るトールキンの「ケルト」観・「ゲルマン」観の成立過程を問い、その継続性ないし変遷の有無、学問潮流とその変化の文脈という視点からの分析も試みる。

### 3．研究の方法

(1) オックスフォード大学ボドリアン図書館所蔵のトールキンの未刊草稿は、トールキ

ン財団により一切のコピー、スキャン、写真撮影などが禁じられているため、アーカイブに滞在し草稿のトランスクリプトを手作業で作成する。

- (2) 作成したトランスクリプトの分析によって、テキスト変遷を明らかにする。
- (3) 国際学会やオックスフォードでの在外研究期間に築いたトールキン研究者のネットワークを通じて、情報のアップデートや専門家の知見を得ることにより、研究の質の向上をはかり、研究の発展につとめる。

#### 4. 研究成果

I. 本研究の第一の目的であったオックスフォード大学ボドリアン図書館所蔵の、トールキンがリーズ大学で教鞭を執っていた時代に行った未刊の公開講義"Celts and the Teutons in the Early World" (1929)の手稿原稿の調査は、パンデミックという未曾有の事態発生のため、渡航が出来ない状態の発生により、三年間渡英が叶わず全く調査が出来ない状態が続いたが、研究助成期間の延長が認められたため、2022年の夏と2023年の夏にはやっとボドリアンでの調査を再開でき、2023年にはオックスフォード大学でトールキン没後50周年を記念した国際学会での口頭発表も行えた。

トールキンの初期の手稿原稿は、'English and Welsh'の草稿とも筆致のスタイルが異なり、解読が時として極めて困難なものでトランスクリプト時間のかかるものであったが、初期の"Celts and the Teutons in the Early World"の手稿原稿調査により、以下を明らかにすることが出来た。

- 1) 後の1980年代に最高潮を迎える、Patrick Sims-Williamsらケルト学研究者による「ケルティシズム」批判の潮流の核となる、「ケルト」の概念を規定するのは「民族・人種」ではなく、あくまでも「言語」であるという学問的大前提を、トールキンが1929年という早い時点で堅持していたこと。
- 2) トールキンがこの講義録の一部を1955年の"English and Welsh"で再利用していたこと。
- 3) このゲルマン語とケルト語に関する1929年というトールキンの学問的キャリアのごく初期における講義が、ファンタジー作家としての地位を『指輪物語』の出版によって不動のものとした1955年の英語とウェールズ語における講義に直接繋がるものであると同時に、四半世紀の間のケルト学の動向の変化も反映していること。

II. 本研究の第二の目的は、同じくボドリアン図書館に所蔵される、*Report on the Excavation of the Prehistoric, Roman, and Post-Roman Site in Lydney Park, Gloucestershire*のAppendix Iとして出版されたトールキンによる"The Name Nodens" (1932)の未刊の手稿原稿の調査であった。この調査に関しても同様にトランスクリプトは困難を極めたが、オックスフォード大学のケルト学研究者の力も借りながら、以下のような成果を上げることが出来た。

- 1) 出版されたバージョンには、Lydneyという地名に関する考察は含まれていない。しかし未刊行の手稿原稿、および同じくボドリアンに収蔵されている、この考古学調査を行ったMortimer Wheelerとの書簡のやりとり、またこの原稿を用意するにあたっての準備段階で地名研究の権威Allen Mawerと交わした書簡からは、トール

キンが Nuada -Lludd- Lydney の関係について、出版ギリギリまで、延々と考察を続けていたことが分かる。結果的には出版された論文には含まれなかった膨大な考察過程を示す手稿である。

- 2) この手稿原稿を調査するきっかけとなったのは、トールキンの“English and Welsh”の手稿に残された“Lydney”という走り書きのメモの存在であった。出版された“English and Welsh”には Lydney に関する言及は残っていないが、講演の構想段階において、トールキンは英語の地名 Lydney の背後に存在する可能性のある、ケルト語の Nuada-Lludd に関する神話を読み取れるか、考察を重ねていたわけである。こうした調査も、今まで全く行われておらず、トールキン研究の発展に寄与できるものである。

III. 学会での口頭発表や論文出版として研究成果を公にしたものとして、以下のような成果をあげた。

- 1) コロナ禍で渡英が叶わなかった時期には、日本ケルト学会を主な学会活動拠点として、トールキン異界観・妖精観と「ケルト」に関する考察を行った。日本ケルト学会での研究口頭発表に加え、2023 年にはこの学会の 50 周年記念論集『ケルト学の現在』では、中世からトールキンに至る「妖精」と「ケルト」の繋がりについての論考を出版した。
- 2) 日本英文学会の 2023 年の第 95 回全国大会において、招待講演として行った「J. R. R. Tolkien と『ケルト』」の内容については、オンラインの Proceedings として閲覧が公開されている（<https://www.elsj.org/backnumber/proceedings2023/proceedings-2023-yokohemmi.pdf>）
- 3) 2023 年はトールキンの没後 50 年を記念して、オックスフォード大学で国際学会も開催されたが、ここでトールキンの「ケルト」観の根幹となる“British”観をケルト学研究の視点から論ずる口頭発表を行った。
- 4) 学会・研究者だけでなく、一般読者を含んだ読者層をターゲットにした『ユリイカ』のトールキン没後 50 周年記念号では、一般に誤解されていることが多い「ブリティッシュ」と「ケルティック」という概念について、科研費による助成でのトールキン研究の成果を取り入れた論考を出版した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 辺見葉子	4. 巻 26
2. 論文標題 アイルランドの初期フォークロア集にみる妖精たち	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Celtic Forum	6. 最初と最後の頁 44-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辺見葉子	4. 巻 55-14
2. 論文標題 トールキンと「ブリティッシュ」／「ケルティック」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 166-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辺見葉子	4. 巻 25
2. 論文標題 J. R. R. トールキンの「不死の楽園」再考（Part 2）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Celtic Forum	6. 最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辺見葉子	4. 巻 24
2. 論文標題 J. R. R. トールキンの「不死の楽園」再考（Part 1）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Celtic Forum	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辺見葉子	4. 巻 23
2. 論文標題 トールキンとオドネル・レクチャー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Celtic Forum	6. 最初と最後の頁 17-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 辺見葉子
2. 発表標題 J. R. R. トールキンと「ケルト」
3. 学会等名 日本英文学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoko Hemmi
2. 発表標題 Tolkien, 'British' identity, and Celtic studies
3. 学会等名 Tolkien's Words and Worlds: An academic conference to mark the 50th anniversary of Tolkien's death（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辺見葉子
2. 発表標題 アイルランドの初期フォークロア集にみる妖精たち
3. 学会等名 日本ケルト学会
4. 発表年 2022年

1．発表者名 辺見葉子
2．発表標題 トールキンの不死の楽園再考 Part 2
3．学会等名 日本ケルト学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 辺見葉子
2．発表標題 Tolkienの「不死の楽園」再考
3．学会等名 日本ケルト学会 第40回研究大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 辺見葉子
2．発表標題 C. J. O' DonnellとTolkien
3．学会等名 日本ケルト学会
4．発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1．著者名 辺見葉子、梁川英俊、疋田隆康、林邦彦、森野聡子、不破有理、鈴木暁世、小池剛史	4．発行年 2023年
2．出版社 三元社	5．総ページ数 523
3．書名 ケルト学の現在	

1．著者名 辺見葉子、吉田敦彦、松村一男、山我哲雄、篠田知和基、月本照男、奥西俊介、原山煌、坂井弘紀、萩原眞子、古川のり子、森雅子、山田仁史、沖田瑞穂、松原孝俊、大城道則、木村武史、加藤隆浩、後藤明	4．発行年 2019年
2．出版社 河出書房新社	5．総ページ数 558
3．書名 世界の神話英雄事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------